



保育園の窓から

園長 野中 泉

ひとりめの子どもを産んでしばらく仕事を辞めて子育てだけをしていた頃、私は自分がすっかり社会から取り残されたような気持ちになっていました。そんなモンモンとしていたある日、ひとりの先輩お母さんが、こんなことを言いました。「私は、子どもを持ったことでかえって社会の窓が開いたと思ったんだよね。子どもに食べさせるとしたら、食品の添加物が急に気になるようになったし、子どもが辛い目にあったニュースを他人事と思えなくなった。私は、子どもができるまで、自分の国のことや自分のまわりの社会のことなんて、まじめに考えたことなかったなあと思って」。20年以上前のことですが、「なるほど」と感心したことを思い出します。

そして今、保育園の窓からも、これまでの私には見えていなかった社会が見えてきます。子どもが熱を出してお迎えをお願いする電話を職場にかけるけれど、なかなか仕事を抜けられないお母さん。登園時に、少し具合が悪そうな子を「仕事を休みにくい。保育園から電話があった方が、帰れるから職場に電話してほしい」とすまなそうに置いていく人もいます。当たり前ですが、保育園での集団生活が始まるといろんな感染症をもらい乳児は何度も熱を出します。いちご組やもも組のお母さんが職場を休むことが続き嫌味を言われて思わず涙が出てしまうことも。「子どもは熱を出しながら強くなる。もう、2・3年のことや、がんばれ、がんばれ」と励ましたことも2度や3度のことではありません。

特に、コロナ禍といわれるこの2年は、いつも以上にたくさんのことを考えさせられてきました。いわゆる第一波のときは多くの家庭に家庭保育協力をお願いしましたが、「夫婦共にテレワークなので家庭保育しているが、小さな子どもが走り回りとても仕事にならないのにノルマは減らず苦しい」。「自営業の仕事が減って経済的に不安になっている」、「仕事は休みだが、3兄弟と母だけで2週間以上家にいて限界、壁に穴があいた、もう子どもに手を挙げそう」などなど、聞こえてくるその実情は、ほんとうに息苦しいものでした。では逆に自粛期間中も保育園にずっと預けていた保護者が楽だったかというところ、そうではありませんでした。「パート先を休んだら首にするとされた」「店を閉じたいけど、今閉じたらコロナが出たと思われる。世間の目が怖い」「こんな状況で、子どもを保育園に預けて働かないといけないことが苦しいのに、上司からみんな頑張っている時にわがまま言うなと恫喝された」。

少子高齢化が日本の社会で問題視されはじめたのは、もう何十年も前のことです。地域のつながりが薄まり、しんどさを抱えて孤独になりがちな子育てが心配されるようになってからも、もう何年もたちます。でも、一向に子育て世代にやさしくならない社会なのだと、悲しくなります。ネット社会を中心に氾濫する情報に振り回されながら、自分の子育てが正解かどうか自信が持てない若い親たちの苦しさは、正解や効率ばかりが重視され、試行錯誤の子育てに寄り添う余裕のないこの社会では当然の苦しさだと、思わずにはられません。

今から55年前。子どもが生まれても働きたいと願ったお母さんと、それを支えたいと申し出たもうひとりのお母さんの思いからはじまった私たちの保育園。自分たちのまちにそんな場所がないなら、一緒につくろうと発想したその始まりを、改めて思います。私たちの園の窓は、今も社会にむかって開いているだろうか。自分の国のこと、自分のまちのこと、子どもたちが育つ社会のこと、誰かのせいにするばかりでなく、私たちにできることは何かを、この窓から一緒に考え続けたいと思います。